

『失った二人の息子』(ルカ 15:11～32)

この譬えは弟の物語と兄の物語とから構成されています。この譬えが「放蕩息子の譬え」と言われるのは弟の物語に譬えの重点があると見ているからだと思われます。しかし、この譬えでは家を出て行った弟が家に帰ってきたことを歓迎している父親に向かって、兄が不平不満を漏らしている姿が描かれています。自分は正しいと思っている人が喜べないという問いかけがこの譬えの核心であると思われます。

弟は財産を使い果たし帰郷しました。当時のユダヤ社会では、一度家を捨てて村を出た者は成功して村に恩返しをするのでなければ、受け入れられるのは困難でした。父親の弟のところへ走り寄って、首を抱いて接吻したという行動は、父親のこの上ない喜びを示すとともに、僕たちや村人たちの前で、弟との和解を示すものでした。また、子牛を屠って村人を宴会に招くことは、弟を家と村に復帰させたいという父親の願いを受け入れて貰うためでした。25 節の言葉は村人が和解を受け入れたことを示しています。

さて、兄は畑から帰って来て、時ならぬ宴会の様子に不審に思い、僕に尋ねました。兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が家から出てきてなだめました。兄の不満は父親が弟のこのような帰郷を自分には示したことの無いような仕方だと思っています。兄は真面目で正しい人ですが、それ故に、父親の行動を素直に受け入れられず、祝宴の席につくことができないのです。兄は自分は弟よりも立派に行動してきた人間だと思っています。その基準に従えば、弟はこのような祝宴を受ける価値はなく、むしろ自分こそふさわしい、と考えています。一方、父にとっては、どちらも息子であることに変わりはなく、弟を喜び祝うのは当たり前なのです。兄は父親が行った宴会の本当の意味、弟を村人に受け入れてもらい、家族の一員として認知してもらうこと、を理解せず、そのような宴会を自分にはしてくれなかったと表面的に見て、怒っているのです。

この譬えは父親の呼びかけの言葉で終わっています。兄は父親の招きに応じたのでしょうか。ルカの文脈で読むと、兄の否定的な対応を想像しないわけにはゆきません。しかし、譬えそのものを読むなら、三人の関係は「死んでいた弟が生き返った」ことにより新しくされたと訴え、手を差し伸べている父親の招きに兄は応えたのではないのでしょうか。

イエスは業績により自分の優位に固執し、自分より劣る者を拒絶するのではなく、一人ひとりの存在そのものを評価する神さまの愛に心を開き、家族という共同体の再統合を共に喜ぶことを私たちに教えているのではないかと、思うのです。